JICA 地域別研修　中西部アフリカ幼児教育

<研修生へのフィードバックアンケート結果>

(2006.10.11 お茶大実施)

1.日本の幼稚園･保育所、子育て支援センターを参観した感想や印象に残った点をお書きください。

- 子どもの自由と自律／規則、衛生、清潔の尊重／教師の子どもに対する注意･配慮／教室や廊下での遊び道具の機能的な配置
- 訪問した施設はすべて監督省庁によって作られた基準に合致しており、設備は非常に清潔で充実しており、活動的な職員のもとのびのびと発達する子どもたちの姿が見られた。
- 見たことすべてに魅了された。関わる人々がそれぞれの意欲と支援によって、乳幼児教育のシステムを発展させることができていることを実感した。
- とてもよい印象をもった。現場によって異なる方法と目標をもっていることがわかった。
- 我々は保育センターの発展の政策、方法論的な原則、施設の設備等について、多くを学ぶことができた。
- 研修の経験とそれに私の国の人々を巻き込む（共有する）ことで、我々は乳幼児の発達を促すことができるだろうと感じることができた。
- 子どもの世話をする施設全部が印象に残った。教育的な目標は場所によってそれぞれ異なっているが、幼稚園･保育園の施設の設備や配置が良く、適切な教材が置かれ、子どもの要求に応えていることがよくわかった。
- 良い印象を持った。特に様々な現場を訪問することにより、すべての施設に共通した哲学を理解することができ、施設について共通した概念を理解し、よいイメージを作ることにつながった。
- 全体として、施設の訪問がよかった。訪れた各所で多く類似点を見ることができた。
- 非常に組織化された乳幼児施設で、職員が話し合いに参加し自由に交換している事が印象に残った。
- 訪問はとても実り多かった。日本の乳幼児教育の基礎の原理が施設に生きており、教育的な環境は子どもの調和のとれた発達に非常に好ましく働いている。ここで得たことを我々は自分の国の関係者たちに話し大事であると伝えたいと感じた。
- 幼稚園と保育園の訪問、大学での講義は非常に実りあるものだった。
- 幼稚園では我々によい教育的な組織見ることができた。物理的な環境、教育活動、子どもの自由の尊重などが印象に残っている。

2. ワークショップでは何を学ぶことができましたか。もっとやってみたかったことは何ですか。

- 教育計画／リサイクル品やビンなどから教材を製作すること
- 教育計画の作成／教材の製作／日本と他の国の乳幼児への対応の過程についての発見と交換／教育方法／地域の家族支援／原理と方法論など
- 「教育計画と評価」の作成についての原理と方法論。私か望んでいたのは（下線部筆者）、リサイクル品から教材を作る方法を組織的に、マニュアルの助けを借りながら学ぶことだった。

- アトリエ（大和郷幼稚園）。我々はビンやリサイクル品などの材料から教材を作る方法をもっと具体的に学びたかった。
- アトリエについて、我々はリサイクル品などの材料から教材を作る方法をもっと具体的に学びたかった。
- アトリエはでの実習はあまり役に立たなかった。それは時間が足りなかったから。すべての学習は講義とその後の討論という構成だった。
- リサイクル品からおもちゃを作るアトリエに参加することができた。それから、子どもの世話に同席した経験を交換した。これらは日本とアフリカの文化の豊かさについて私に考えさせるものであった。
- 教育遊具を自然のものやリサイクル品から作ること。／教育活動の発展（作りだすこと）／この研修で得たことから実施のために重要と思うことを自分の国の関係者たちに話すこと。／乳幼児教育の職員研修の過程について、ここに参加した国の間で交換すること。
- 私が非常に興味をもったアトリエは、大和郷幼稚園だった。このアトリエで、私は非常に簡単な物、多様なもので造形活動ができることを知った。この種のアトリエは他にはなかった。
- 東横学園短大は3年課程の保育者養成をすること、ここでは2つの資格を獲得することを学んだ。しかし我々は教科書をどう教えるかについての現場は実際には体験できなかった。
- 乳幼児の発達についてのあらゆる方策が見られた。私は、アトリエに行く前の期待とおりで、とても満足している。
- 乳幼児の発達についてのあらゆる方策が見られた。とても満足している。
- 乳幼児職の養成のプロセスを深めることができた。

3.日本の幼児教育のどういう点を自国に取り入れたいと思いますか。それを実現するためには何から始めればいいと思いますか。

- 0－3歳の子どもの教育の原則、保育者養成／世話と教育の策定実行（養成、保育園の施設と運営）／策定実行：日本の原則と方法を我々の学校で試してみること／公立保育園と保育者の養成の創設について我々の機関の人々の関心を高めることが必要だと感じた。
- 子どもに与えられた自由／教材がいつでも手にとれるようになっていること
- 子どもに与えられた自由／子どもの観察／仕事の計画を作りあげること／これらのことはまず、多くの保育施設を設置することから始まるが、また教師を質的にも量的にも養成する必要があると感じた。
- 子どもの自発的な活動に中心をおく教育／2種類の施設（0－3歳の保育所と3－6歳の幼稚園）のそれぞれの役割。前提となる研究の発展。行政者の意志、乳幼児期の発達についての政策の採用、施設の法的な枠組み。
- 子ども中心の教育／子どもの自律的な発達の道具としての遊び。
- 自由遊び（自律性）／一方で現場のアクターと他方で学術的なアクターや行政当局の相手の協力。
- 日本の乳幼児教育の形／就学前教育の教師の養成と研修のシステム／リサイクル品での教材作り／幼稚園と小学校の協力／子育てのための地域支援／これらのことを実現させるためにとるべき適切な措置は、(人々の)関心を高めることであろう。
- 日本の乳幼児教育の特徴／乳幼児の教育方法／就学前施設の運営と経営／乳児の健康と衛生面の管理／親子支援センターの創設／職員研修のプログラムと内容
- 乳幼児教育の形／教師の養成と研修のシステム／リサイクル品での教材作り／幼稚園の生活に人々を巻き込むことの必要性

- 発達の要因としての遊びと子どもの発達／教室の設備･配置／衛生と栄養／子どもの権利／これらを実現するために、自国において研修セミナー、それから職員養成を組織化するつもりである。
- 幼稚園と保育園の協力／子ども中心の教育／学校での「生きた」環境の実現
- 周囲の文化を大事にすること。特に教材や玩具の製作を通して自然環境を探索すること。教師の観察能力、子どもの発達段階についての知識、子どもの要求、自由に扱える教材等を通して充分に実験するための自己信頼感をもつこと、健康面のフォローの強化、事前の関心を高めることとが不可欠である。
- 教育と養護の統合、栄養がどこの施設でも行き渡ること／大学付属機関の創設。(職員養成の機会を開き、また乳幼児発達に関する研究と普及をするため)
- 乳幼児教育の方法論／子ども中心の生活の展開／教師の養成システム／乳児の健康と衛生管理／家族支援のセンター
- 遊びと環境に中心をおいた教育、子どもに中心を置く原理、その重要な点。我々の学校で原理と方法を試してみること

4. 反対に取り入れるのに難しいと思われる点は何ですか。その原因は何だと思いますか。

- 一つだけの言語の使用。ブルキナファソでは言語の異なる民族が60以上あることを考慮しなければならない／機関への公的な補助金の率。国家財政の貧困のため。
- 教育と養護の問題／保育のための財源の問題／保育園の基準の遵守／子ども一人一人の主体性に基づくことの重要さ／乳児死亡率の低下のために取られる多様な措置／充分な栄養ー成長に安全な環境
- 子ども、遊びに中心を置いた教育。それは空間、教材、子どもの過剰な数などがその実現を難しくしている／保育の実行措置。保育士養成が存在しないこと。
- 子どもの自立性に基づく自由な教育／現場の幼児教育に関わる人々にとって、このシステムをすぐ実行することは難しいだろうが、試してみようと思っている。
- 多方面の当事者間の関係的なアプローチはわが国では違う形で現実化するだろう。乳幼児期は政府にとって優先的な位置を占めていないことが理由である／自治体の財政的脆弱さによって、インターヴェンションはうまく行かない。
- 乳幼児教育の行政（運営）／財政、行政、組織。
- 幼い子どもの世話をする施設の一元化。子どもの教育の要請は非常に強く、国は教育の供給を自由化した。この地方分権化の過程はまた、施設がそれぞれ独自の将来に直面することとなった。
- 日本から何かを取り入れるに当たって、すべて、物的資源、人的資源が現実化してはじめて容易になるのだろう。それでなければすべてが難しい。
- 活動の間の完全な（子どもの）自由。しかし、子どもの数が多すぎる状態、教材の不足を考えると難しいだろう。
- 教室の設備。多種類の教材を用意することが財源不足で難しいため。
- 子ども中心という原理にとても強い感銘を受けた。この概念にしたがって試してみたい。しかし、完全な自由を保障しつつ活動を組織化するのは容易ではない。教師が充分に養成･研修を受けたのちに実行できるのだと思う／センターを作り、場所を提供して親の機能を支援することは、見本にはなるが始めるのが難しい経験だろう。たとえ望んでも方法がない。

- 親の教育、遊びのみに中心を置いた教育。その理由：親教育のセンターがないこと。学校の人数が多すぎることを問題視していないこと／人材、教材、保育者養成の不足。
- 乳幼児教育の特徴：現場の教師と研究者の協同／乳幼児教育の方法論／子育て支援施設の「ぴっぴ」のようなセンターの創設／乳幼児教育についての不理解、無知、文化的な手段と側面の欠如。
- 幼稚園の設立は地方自治体の義務であること。

5. 自国の課題とは何ですか。この研修をふりかえって、改めて認識したことをお書きください。

- ブルキナファソの乳幼児期の発達とその将来。なぜなら、我々は就学前教育の取り組みをはじめたばかりであるが、貧困のためこの取り組みの重要性を理解する人の率が低いからである。
- 教育の原理の改善／保育および家族支援の継続性のため、0－2歳児と3－6歳児がそれぞれ別の窓口となっていることを統合したい。
- 現場のアクターの資質を強化すること／人々の関心を高めること（地域での参加的アプローチで）。
- 教育者の初期養成と現職研修の間の関係を強化すること／乳幼児教育の統合的なアプローチを発展させること。
- 子どもが発達の主体であること／教育計画に基づいてよく組織化され、教材の豊かな学校。／自治体を最大限働きかけること。
- 量的質的な充分な教師の養成。
- 乳幼児を受け入れる施設を作ること／学校の施設整備と環境作り／子ども中心の教育。
- 量的質的な充分な教師の養成／乳幼児施設を作ること／リサイクル品の製作による学校の設備の整備／よい社会的環境／病気の予防／子ども中心の教育。
- JICA の支援によって、カメルーンの幼児教育は近い将来大きく拡がるだろう。この分野の専門家によって、彼らはこの研修で得たことを価値付け、子どもの全面的な発達を支援するために、現場で実行するようになるだろう。
- この研修は乳幼児の発達の将来に非常に役立つと思うが、それは当局がこの問題の重要性についてのセクター（の主張に）同意してくれことが条件である。
- この研修後、得た経験を実行すること。カメルーンの就学前教育をうける子どもの率を上げること。
- もしも、親と学術関係者の関心を高めることがうまくできたら、将来は明るいと思う。
- 乳幼児教育のアクターは子どもの最良の支援者になるために養成されなければならない。
- 受け入れ施設の改良へのアクセス。施設の運営について機関を巻き込むこと。当該の施設での教育の質の向上、教師が幼い子どもによりよく対応できるように、また子どもにより役立つ活動の組織化をするための手段を向上させること、自治体が重要性をより認識して子どもをたくさん登録すること、教育環境の向上。
- 政府、自治体が広くこれを導入すること／乳幼児教育を優先課題にすること。
- 適切な生活の枠組みのなかでの就学前施設の拡大：よく整備されたアトリエ、教材が充分あり、職員の質が高く充分な数がおり、教育政策が練り上げられ、適切な教育方法をもち、研究者によって支えられ、自律的な子どもたちが健康である、という施設を作りたい。
- 乳幼児期の発達に関する政策の実行、保育園と幼稚園の統合、すなわち教育と養護の機関の統合への方向性を見つけたい。

- 理論的には将来は、乳幼児に関する国の政策的なビジョンをもとにして、すでに作られている。ただし、現実はまったく別である。この研修で得たことによって、自分自身を見つめ、子どもを何よりも優先されるものとして見ようとする見方に我々は導かれた。

6. 将来的には、自国でどのような幼児教育を展開したいと思いますか?

- 我々は幼い子どもの世話をする軽くてアクセスしやすい（誰でも利用できる）施設を設置したい／親教育について、親の研修をしたい。
- 子どものよりよい発達のための刺激の豊かな教育／効果的で効率的な教育ー健康ー栄養のアプローチを用いたい。
- 私の国に欠けている聾児の教育／造形活動と玩具劇（マリオネット）を作るための強化
- 保育園と幼稚園（の協力体制）／親の教育。
- どのようなタイプかは、国の現実によって異なるだろういずれにせよ、将来の市民として子どもが調和のとれた発達をするように教育を行う。
- 我々の文化的な価値に対応した教育のタイプ、またそれは他の文化に開かれつつ子どもの発達を助けるものであること。
- 我々は環境を通しての教育、子ども一人一人の主体性の重視、子ども中心の教育を実現したいと思う。
- 環境に配慮した教育。子ども自身の主導性を生かした教育。
- 子どもが知的、社会情緒的、運動的、審美的な能力の発達を、健康、生きる喜び、成功への動機付けを促進する環境のなかで進めることのできる教育。
- 子どもに中心をおいた民主的な教育。ここでは自律性と自由が優先されている。自然や文化の要素に触れながらも、子どもの根源的な要求、欲求、発達段階を基にした教育。
- 子どもの認知面、社会情緒面、健康面の発達に貢献する教育。また周囲の環境に統合する教育。
- 子どもの発達段階、文化的な風土に合った子ども中心の教育。栄養、健康、教育が統合された教育。
- 子ども中心の教育。
- 将来、私は養護と教育をする保育者の養成を行いたい。ブルキナファソでは、0歳から3歳の就学前教育の施設として、保育園が3箇所しかなく、職員は養成を受けていない。造形活動についての非常に実践的な研修によって、私はリサイクルの材料で教材を作れることがわかった。今度は私がブルキナの教師たちに、研修をしたいと思う。

7. 幼児教育分野での国際協力について、日本に期待することは何ですか？

- 技術的な支援（助言、研修、養成）／学校の物質的な支援（紙、鉛筆・サインペン、絵の具、糊、はさみ他）／適切なインフラの整備（教育面、衛生面）／母子のためのプロジェクトの作成と実行。
- 受け入れ施設の建設と施設整備／幼稚園がうまく機能するための物質的財政的な裏づけ／教師の現職研修。
- 適切な受け入れ施設の建設と設備の整備／普及のためのセミナー開催、および研修で得たことについて教師たちに研修するための財政的物質的な裏づけ
- この研修で得たことに伴う支援とその継続性。幼児教育の養成機関の創設への支援、あるいは現職研修についての多面的な支援。
- この研修の後で、教育関係者（現職者）を派遣して、受け入れ施設の創設についての援助に当

たること。

- この種の研修の継続を日本に期待する。人材の面でも財政的な面でも、わが国の乳幼児教育発展のために、私たちに手を差し伸べてほしい。
- 科学的な支援（職員の資質の強化）／物質的な支援、ロジスティックな支援、財政的な支援。これらは国、自治体の努力を強化し、支援するため。日本で組織されるさまざまな研修で得たことを各セクターに返すため。
- 我々はとりわけ日本に期待している。養成についての協力、教材の製作についての協力。我々の国の就学前教育がもっとよくなるための継続的な協力体制が必要である。
- 乳幼児教育の発展のための政策と計画を支援するための技術的、財政的な援助。
- 協力について多くを日本に期待する：この日本で経験をするという研修を続けること／日本人のボランティアをわが国に派遣し、特に現職研修について支えてくれること／障害児（身体的、精神的）の対応についての支援／お茶の水女子大学との交流の継続。
- 親が貧困なために施設に行けない子どものために開かれた施設の建設。
- 乳幼児の施設の建設と施設整備。
- 乳幼児教育の分野のボランティアを現場の仕事をするために、諸国にもっと送ること／教育技術と施設の運営の手助け。
- 北セネガル（Louga,St.Louis et Matam）の「幼い子どもの場合」という施設の建設。
- 幼児教育の職員養成学校を、日本の幼稚園と保育園でなされていることのイメージ（自実践と実践研究）で創設するための援助。

8. 最後に、お茶の水女子大学に対する感想や意見をお書きください。

- お茶の水女子大学から、私の国の乳幼児教育分野での養成の研究に関して多くを教えられた。実践されている課程は非常に感銘深く敬意を払いたい。私の国の教官や研究者などの専門家たちは、機関間協定や他の協力を通して、ここを訪れ、セミナーに参加する機会をもつべきであると考える。そうすれば、わが国の専門家が幼児教育者養成を支え、わが国の乳幼児の望ましい発達に寄与する研究を進めることができるだろう。お茶の水女子大学のチームの柔軟性と協力はすばらしいものであった。
- お茶の水女子大学は実践研究を通して、常に改善の努力をしている。これはアフリカなど他の地平の経験の上にたっている。それによって、理論と実践のつながりを発見することができるだろう。
- お茶の水女子大学は乳幼児教育の揺りかごである。乳幼児の対応のすべてを学ぶのに理想的な場であり、我々は多くのことを学んだ。しかし、次の研修の際には、農村部の現場も見たいと思った。そこではまた別のことが行われているかもしれないと感じたからである。ありがとうございました。
- お茶の水女子大学は有能な教職員を擁していると感じた。これからも我々とともに幼児教育領域での研究を続けられることを願い、また研究結果を他者、特にアフリカの研究者と共有することを願っている。我々はまた、お茶の水女子大学の教員＝研究者たちが、我々のいろいろな分野で活動する研究者や教員を招待することで協力してほしい。お茶の水女子大学は、すぐれたインフラと教育的な素材を使える素晴らしい学習の場である。
- この大学は歴史のなかで若者の養成の道を歩んできたことに誇りをもっていると思われた。大学附属幼稚園は日本の乳幼児教育の揺りかごである。幼稚園の環境は清潔で静かで、研究するのに恵まれていると思われた。大学と附属幼稚園との密接かつ対等な関係が、実践を考え改善すること、また理論と実践の間の橋渡しをすることを可能としているのだろう。大学の教員たちは礼儀正

しい、気持ちのよい人たちであった。今後更に若い男性に対して門戸を開く方向に行くとよいのではないか、と感じた。

- すばらしい大学で、教育のすべての面と職員の対応のよさを感じた。
- すばらしい教職員たちを擁した、とてもよい大学であった。
- 活動的な大学で、乳幼児についてその能力の交換と発展を促進するように組織化されている大学であると感じた。
- 研究と授業の運営の長い経験があることは、とてもすばらしいと思った。大学で有能かつ意欲のある教授陣を擁し、将来に渡って発展していくだろう。しかしながら、私が残念に思うことは、プログラムの中で日本人の生活がよくわかる場所に案内されるということがなく、もう少し日本を発見する機会が研修員にほしかった。これを除いては、お茶の水女子大学は、とても豊かさに満ちているという点で異論がないだろう。大学がこれからも末長く繁栄されることを願っている。
- 私にはお茶の水女子大学は理想的である。それは日本に根を置いているだけでなく、世界、特にアフリカ（ブルキナファソ）のなかにあるからである。大学では0－6歳の子どもたちの保護と教育を行い、彼らの全面発達のための理論枠と方法を提供しているだけでなく、有能で熱心な職員を擁し、保育内容、保育方法、子どもの発達についての研究を行う場でもあると感じた。しかし、この大学で、親が働いていない0－3歳の子どもを受け入れる場があればと思った。
- 資質が高く、すばらしい大学であった。親切で有能な職員を擁しているお茶の水女子大学に感謝する。ありがとうございました
- 非常に満足した。大学は、若い教師の養成と職業生活への導入を行っており、また乳幼児の全面的な発達への配慮に中心をおいていると感じた。
- 満足した。お茶の水女子大学は、若い女性の教育と養成、彼女たちの職業生活への導入、乳幼児の発達のための仕事を行っている。
- 幼児教育のついて、お茶の水女子大学は歴史的に、幼児教育から高等教育まですべての段階の教育機関を同じ場所に置いていることに、多くを教えられたまた、教育の実践研究を、研究者、大学教員、幼稚園教諭たちが共同で行っていることに強い印象をうけた。

(翻訳協力　星三和子十文字学園女子大学教授)
(構成　首藤美香子　子ども発達教育研究センター)